かにた婦人の村のこと

堀内康人

知能指数で測ってよければ二〇未満から七〇ぐらいまでの、不運・不遇・不健康で能力に欠けた婦人を数十名も集め、房総半島の南端で「かにた婦人の村」の施設長をやっておられる深津文雄氏が、『キリスト教保育』の六、七月号に「人間とは何だろう？　その最低点の記録」をのせている。

私はそれを読んで眠られぬ程の感動をおぼえ、それをプリントして幼児教育に関係のない方々にも読んでもらった。私が真先にお願いしたいことは、こうした貴重な記録は『キリスト教保育』がひとりじめしないで、どんな幼児教育誌にも転載してほしいということだ。何故そんなことを開口一番申すかといえば、幼児教育にたずさわり、たずさわろうとしている人々に、基本的に考えていただきたいことが、この記録の中で見事に生き生きと描かれているからだ。

彼はこう申しています。「人間この地上に生をうけるかぎり、全く無用のものは存在しない（中略）……科学が進歩したのは、よいことですが、そこで発明された合理主義が万能になって、チョットやってダメなものはダメなんだ―という怠慢が支配し、不可能が可能になる悦びがどんどん消えてゆく。これは本当の科学精神ではないのですけれども、どうもこの似非科学が流行してこまるのです」と。

彼は苦難の中でこんな風に考えていきます。「人間はお金という便利なものを発明した、そして何でもお金にかえると幾らと計算することを覚えた。そして、とうとう、お金につかわれ、お金のために働く奴隷になってしまった、お金のためには、なんでもする、お金にならなければなにもしない。そのとき、わたくしの脳裏にフトひらめいたのは、幼児たちの姿です。わたくしは二十五歳のひとりもののとき、農村にはいりこんで塾をひらきやがて幼稚園―戦後は保育所―の園

長をした経験がありますが、せんせい、おはようございます、とやってきて、帽子とかばんを釘にかけると、とんでいって積木の箱をひっくりかえし、止められるまで営々と、つんではこわし、つんではこわしする、あの幼児の労働力—あれをどうして人間は一生もちつづけることができないのでしょう？　自由あそびの時間に子どもが展開する、あの意欲的な追究を、なぜ強制的な一斉教育や、おもしろくないお勉強におきかえねばならないのか？……学歴を肩に社会にでると、一生おもしろくもない仕事に、ただ給料のために通いつづける—そうなるために、あの生命にみちた幼児期があるのだとは、どうしても思えなかったのです」と。

こうして彼は、幼児期に基本的にあるものは、人間全体に基本的にあるものでなければならないと考え、かにた婦人の村づくりを、苦難と栄光の中で実践しています。このような紹介では、その姿の全貌は浮び上ろう筈がありませんが、是非その記録全体をお読み下さい。

私がこうして深津氏の人間の最低点の記録を読むことをすすめた主意は、幼児教育が合理主義的に人間発達における幼児期の研究をすることだけではなく、もっと深いところで人間愛の研究であるということをいいながら、その中で近代合理主義批判をしてもらいたかったからです。

近代合理主義の中で、人間もふくめて生物、その生物学は分子生物学へと発展しておりますが、そうした学問をする人々の間にさえ現在、世界的に一つの大きな思想的変換がおこりつつあるということです。それはなにかというと、それらの科学が自然科学、とくに生命科学の立場からのみ発言していたにすぎない、それをもっと人間の方に目をむけなければならない、そしてその人間の文化・思想・精神といったものが生物である人間にとって果して適したものであるかどうか。今の社会は自由社会だという、人間にとってそれが歴史的現実だから自然だというが、まさに非人間的であるかも知れない、現在の社会の価値なりなんなりが疑問になって来る、その疑問のある社会で育てられ、人間は日に日に非人間的にされている、その悪循環をどこで絶ち切るか、そんな根本的な問題と、深津氏の人間愛の教育、そして第二世紀を迎えようとしている幼児教育とを関連させながら考えていく必要があるように思われてなりません。

（東京家政大学）